四方の眺め

中野重治

新潮社版

四方の眺め

一九七〇年九月二五日　印刷
一九七〇年九月三〇日　発行
定価　六五〇円

著者　中野重治
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(03)二六〇—一一一一
振替東京　八〇八

印刷所　株式会社金羊社
製本所　大口製本所

© Shigeharu Nakano Printed in Japan, 1970
(乱丁，落丁本はお取り替え致します。)

まえ書

ここに集めたものの大部分を私は一九六一年に書いた。最後の一篇だけが一九七〇年のものである。ただし、最初の一篇は六一年二月号の雑誌に印刷されたから、手で書いたのは六〇年末だったろうと思う。しらべてわかることでもあり、しかし何にしても大部分ざっと十年前のものである。

これらを私は雑誌『新潮』に書いた。つまりこれらは『新潮』に連載された。この連載ということは、日本の、私自身の知る実情に即していえば厄介なものである。同時に便利なものでもある。毎月書かねばならぬということから無理にも書くことになり、そこに、特に私の場合いい加減にでも書いてしまうということが生じる。そこにまちがい、誤りが生じる。しかしまた誤りその他を割りに早く訂正することもできる。私はじっさいいろいろの誤りを書いた。その訂正のことも書いている。そうして、十年たってみると面白くないこともない。私はよたよたとして書いているが、十年たってみるとそのよたよたに意義が見出せるようでもある。

これらを私は無理にもいい加減にも書いた。最初からそれは意識にあったから、私は、自分は

問題を終極まで逐って考えてその挙句に書きしるすのだという態度をとらなかった。雑誌に書いたとき「途中の問題」という題をつけていたのもそれによる。最後の結着の姿ではない。途中の考えだということを告白していたものでもある。そこに売文業者の姿の一面があり、尊敬する学者たちの姿とはちがったものがある。しかし学者たちではあっても、長い物指ではかれば途中の問題ということがあるものなのかも知れない。そこはわからぬ境地ではあるが、自分のよたよたを私は必ずしも恥じてばかりはいない。自慢にも何にもなったものでないことはわかっているが、これだけのものとして提供しても悪くはないと思っている。

私は、「中華民国」のことについて早とちりの勘ちがいをやり、諸方に迷惑をもかけた。しかしそこで、十年たってみて、今日ただ今の日華会議といったものの動きに照らして、日本人谷、日本人岸などの姿が思い出されてくるというようなこともないとはいえぬ気がする。まずまず私は目をつぶることができる。特に私は、阿波丸のことなどではあらためて訴えたい気持ちを持っている。なお、すぐにも一冊の形にするようなことを言っていて、べんべんとして十年も待たせてしまった新潮社出版関係の人たちに感謝する。本の題は、できれば「しほうのながめ」とよんでもらいたいと思っている。

一九七〇年夏

著　者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

四方の眺め・目次

年頭歳末　9
一めぐりか　二めぐりか　28
文意明瞭のこと　48
外国と外国人　72
吉田松陰と福沢諭吉　89
無知と軽はずみ　110

花束と国宝　132
プライヴァシーと「せいのび」　151
フィクションと真実　181
実物、実名の場合　198
ばたばたとした日暮し　224
阿波丸、国会、日本人　246

装幀　駒井哲郎

四方の眺め

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

年頭歳末

中途半端がいいか中途半端でない方がいいかとなれば、中途半端でない方がいいに決まっている。いつか平野謙が――言葉は正確にもおぼえない。――おれは中途半端が好きだという意味のことを書いて、すると小田切秀雄が――やはり言葉は正確にもおぼえない。――おれは中途半端がきらいだという意味のことを書いた。しかしそもそも、中途半端が好きだといったことを書いたにはしろ、平野謙は、中途半端こそ最上だといったわけではなかったろう。中途半端という言葉そのもの、この観念そのものが、中途半端でないものをこそ前提として予定していた。そうでなければ、中途半端そのものが出てきようがない。平野、小田切の名は、かれらの言葉を正確に引用できぬ今ここで削っておいていい。つまり私は、かれらの名にひっかけないで書く必要がある。ところで、その私が、私一個として、自分が中途半端なところにいるのを感

じて我ながらいやになることがある。しかもそのことを書いて発表することに、すでに中途半端な疑問が出てきてしまう。何かそんなことについて、自分の文学的な意見、自分の政治的な意見を書いて発表することにすでに疑問が出てきてしまう。ところでまた、書くことはそもそも私の職業なのだから、これは職業にたいする疑問ということにもなるが、人は、わが文学的同僚たちは、そのへんをどう割りきってやっているのだろうか。

といったところで、この中途半端な心持ちそのものを完全に追究することが自分でできないのだから、人はそこをどう処理しているのかと問う資格が完全には私にないことにもなる。問う資格がないのに人に問いをかけるのは、ことがらによっては卑怯になる。人はどうやっているのだろうかと問いたい気持ちは私にあり、この際それが卑怯になるとも私は思わぬけれども、こう問いかけることもここで私は止めておこう。いくらか便宜主義的にそれは止める。

中途半端な気持ちは、自分の本職としての文学について第一にある。前に一度、私は、そういう自分の正体が暴露されて内心恥じたことがあった。そのとき私はそのこ

とを一、二行書きかけても見た。そうしてうまく書けなかった。そうして、うまく書けないそのことが、さらにもう一つ私の正体暴露になっていることはわかるもののそこがなかなか直らない。私は文学を本職としている。これは自分でえらんだもので他から強制されたものではない。自分でえらんだその本職をば、どこまで私がほんとに尊重しているか。一方では、おれは文学を大事にしているぞという気持ちが私にある。それほど大事にしていないある文学者たちに比べれば、たしかに私の方がずっと大事にしていると思う。しかしそういう比較をはなれて、殊に大事にしていない方の人々との比較をはなれて、全く大事にしている人々に比べてはどうなるか。またそもそも他との比較ということから離れて、世界と文学と作者とという関係のなかでそれはどうなっているか。これではならぬと思いながら、何やかやで——何やかやでといったいい方にすでに問題があるが——ずるずると、文学を尊重しない方へ引きずられている傾きが自分にある。

一昨年（一九五九年）の春の終り、ソ連作家大会のあとで私はグルジヤへ行った。印度ケララの作家ピライといっしょだったが、ある日私たちは、出あるきの途中で年八十五になる一人の栽培家を訪ねた。栽培家というのかどうかよくは知らない。園藝

家といってはちがってくるようにも思うが本筋には関係ない。とにかく、一たいにあのへんはあったかくて、ロシヤとちがって草木の類が日本のに似ている。松、杉、檜、イブキ、カシ、タイザンボク、アザミ、シュロ、カシワ、ボダイジュ、カエデ、ユーカリ、ツバキ、ヤナギ、スズカケ、赤花アカシヤ、ツツジ、クサツゲ、スイレン、羊グサ、クスノキ、アオキ、キリ、アジサイ、バラ、南天、ヒイラギ南天、マサキ、テッセン、イチジク、クワ、カラタチ、エニシダ、クルミ、ブドウからギボシなどいう種属までびっしり繁っていて、たぶん私は油断の気持ちになっていただろうと思う。日本風でない植木もむろん一ぱいにあった。

私たちが手を出すと、老人は手を握りこぶしにしたままで出した。老人は、仕事していたところだったから手のひらを泥だらけにしていた。そのための握りこぶしということがこちらにわかって、そんなことさえ私の油断の気持ちを助けていたろうと思う。シャボテンの温室を見たり、自慢の「日本の楓」を見たりした挙句に、つい私がこんな意味のことを老人にいってしまったのだった。

「私も、文学なんぞやるより栽培のことをやればよかったにと思いますよ。」

言葉はやはり正確には覚えない。意味はたしかにそんなことをいった。

「ふうん……」

老人はそんなことをいったが、それきりこのことには触れなかった。そして私はどっと後悔した。

通訳してくれたイリーナ・リヴォーヴとは大分親しくなっていて、彼女の方から私にいろいろ意見を聞かせてくれるようにもなっていたが、彼女もこのことにはついぞ触れなかった。ピライも、もともと話は、リヴォーヴを介して老人と私とのあいだで、ロシヤ語と日本語とだけでかわされたのだったから何もいわなかった。何も格別、こんなことで考えぶかそうにする必要はない。ただの挨拶、いくらかの冗談として、その場はそれなりにすんだのでもあったろう。問題は私本人にあった。ピライは——インドないしケララには日本のような文壇はなかったから——牛などを使って百姓しながら文学の仕事をしていた。その彼の横で私の口からそんな言葉が出たのだった。才能が大か小かということではない。大小ということはもとよりあるが、小才能ならば小才能なだけ、私は文学において一そう本気であるべきだったということが残るだけだろう。

「そんなちっぽけな才能で、文学などいうものをお前はやろうというのかね……」

そう訊かれたとして、私には答えが一つだけあるはずだった。

「さよでございます。それだけに、私としては一心になってやっているのでございます。」

年八十五にもなって、顔も首すじも渋紙色に陽にやけて、背中が曲がって——この老人は珍しくいくらか背中が曲がっていた。——現に手を土まみれにしている老人を前にして、「私も、文学なんぞやるより栽培のことをやればよかったにと思いますよ。」——よくもそんなことがと思うけれど追いつかない。いくらかの冗談、その場の挨拶だったことにもまちがいないが、ほんのいくらかは、本気のかけらがないでもなかっただけに厭やになる。とにかく、文学をやって行くということについての腰くだけの気味が私にあって、そこから結果としてあんな言葉も口から出たのにちがいなかった。これだけでは、説明にも何にもならぬ気がするがそれは仕方ない。とにかくそんなものが私にあり、それは事実だった。文学にたいする自分の批評のなかにすでにそれがあった。

このごろ私は松本清張の「波の塔」を読んだ。それは面白かった。私には、朴訥な

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.